

10% フォルマリン, リチャードソン氏液による固定後 40~80  $\mu$  の氷結連続切片を作成, 瀬戸氏鍍銀染色を行ない検鏡しつぎの所見を得た。すなわち前縦靱帯と繊維輪の比較的表層部に脊髄神経節より末梢部で分枝分散した神経線維を認め, その末梢は自由終末を思わせるもの多く, また, 知覚性支配については脱神経により椎間板内神経線維束にも変性を認め, その後根性支配の存在を憶測し得る。内臓知覚線維の分布は文献的にも交感神経幹を介して広範に分布しているところから, 腰痛などに関しても discogenic pain が放散痛として, 広範な莫然とした深部痛のごとく感ぜられるのも理解できるが形態学的裏づけは今後の研究に待ちたい。

14) 非特異性脳脊髄炎の4例

羽津病院整形外科 竹内 孝

胃腸症状, とくに下痢, 腹痛などを前駆として発症し, 既知の神経系疾患と若干異なつた脊髄症状を呈し, 診断に困難を感じた4症例を経験したが, 鑑別診断の結果, 非特異性脳脊髄炎の範疇に属するものであつた。

治療法として, Vitamin B<sub>1</sub> 剤, Steroid hormone ATP, 抗生物質などが効果があるようである。

15) 一家系内に多発せる脊椎分離症例

上都賀病院整形 五味淵諒一  
大井利夫  
千大整形 大山隆男

脊椎分離症の病因が先天性であるか否かは議論の多いところであるが, 最近われわれは一家系内に多発した脊椎分離症例を経験したので, 若干の病因論的考察を加え報告した。

この家系は3世代16名より構成され, そのうち13名につき調査し得たものであるが, 3例23.1%に脊椎分離症および疝り症を(分離症2例, 疝り症1例), 5例36.2%にいわゆる Isthmus hypoplasie を認め, また, 3例23.1%に潜在性脊椎破裂を認めた。

これらの脊椎分離症および疝り症において, 外傷との相関々係は認め難く, われわれは脊椎分離症の病因を考えるに当たり, 先天性に分離症が存在しないまでも, Brocher, Wiltse らのいう Isthmus hypoplasie ないし dysplasie のごとく遺伝的性格を有する何らかの因子が先天性に存在し, その上に生後の種々のストレスが作用して脊椎分離症が発症

するものであらうと推論した。

16) 興味ある腰部椎間板ヘルニアの一症例

千葉労災病院整形 石川芳光  
西川侃介  
千大大学院 上原 朗

症例 31才男子, 職業建築設計, 38年5月腰部に鉄骨が落下して腰痛, 左坐骨神経痛発現 39年2月ラブ氏法による髄核剔出術をうけ軽快退院, 術後7カ月にて原業に復帰したが術後9カ月にて再発した。ミエログラフィー, ディスコグラフィーにて第4腰椎, 第5腰椎間椎間板ヘルニアの再発と診断され術後1年3カ月にて経腹膜的椎間板切除椎体前方固定術を施行した。手術時所見では前回手術時にとりだした髄核部に一致して欠損があつたが, 侵入路と思われる後部線維輪周囲に肉芽様物質が認められた。この部は組織所見によると変性線維輪であり, これが修復機転のわるい前回侵入路より膨隆してヘルニア症状の再発をみたものと思われた。このことは腰部椎間板ヘルニアにおける変化が広く軟骨板, 線維輪にも存在するためその後方侵襲においては本例のごとく変性線維輪による腰部症状再発のおそれが存在することを示す興味ある症例であつた。

17) 脊椎々間板手術症例の検討

一とくに椎間板障害例における手術適応について一

沼津市立病院 斯波 隆, 伴野恒雄,  
寺島市郎

過去1年間における腰椎32例, 51椎間, 頸椎3例, 7椎間の手術症例の検討を行ない, 術前検査としての Discography の重要性, また Myelogram で所見を認めず, Discogram で変性像のみを示す, 保存的療法の限界点にあると考えられる障害椎間板に対して積極的前方手術の適応が望ましいとの見解について述べた。

18) 教室における先天性側彎症の保存的および観血的治療の検討

千大整形 井上駿一, 立岩正孝,  
辻 陽雄, 三橋 稔,  
大木 勲, 上原 朗  
千大大学院 渋谷光柱

従来 Congenital sclerosis の予後に対する認識, および治療体系には一貫した見解がなく, とくにわ